

## ⑮近代日本における思想戦の系譜

### (1) 思想戦の契機—総力戦と日本陸軍—

- 第一次世界大戦後の思想戦

- 永田鉄山の『国家総動員に関する意見』（1920）；「普及宣伝機関」の必要性  
陸軍省；「新聞班」（1919、陸軍大臣官房に設置されていた情報係が母体）  
海軍省；「海軍軍事普及委員会」（1924）  
外務省；新聞部（1920）

- 内閣情報委員会

満州事変後の1932年6月には陸軍と外務省が対外宣伝に関する意見交換を目的に「時局同士の会」を設置し、のちに海軍省・文部省・内務省・逓信省が加わることによって、非公式の内閣情報委員会が設置された<sup>1</sup>。これは外務省に設置され、委員長が外務次官、委員は外務・陸軍・海軍から各2名、文部・内務・逓信からは各1名で構成されていた<sup>2</sup>。それから内閣直属となるのは、1935年の岡田啓介内閣時で、陸軍省軍務局の池田純久中佐が内閣官房の横溝光暉へ提案したことを契機に実現された。（委員長は内閣書記官長）

→「支那事変」を契機に「内閣情報部」に改組（1937）。

→1940年12月に情報局が新設（第二次近衛内閣）

- 日本陸軍の思想戦

- 新聞班の「普伝活動」の必要性

シベリア出兵や軍紀違反に対する反軍感情や第一次世界大戦後の平和ムード

- 『国防の本義と其強化の提唱』（1934）…陸軍パンフレット（「新聞班」）  
「たたかひは創造の父、文化の母」

そもそも陸軍省パンフレットは満州事変以降、数多く作成されていたが、その読者のターゲットは民間ではなく、陸軍部内であり、満州事変に関する情報や陸軍省の主張を述べたものであった。発行元が陸軍省調査班から新聞班に移管された1934年7月以降にはパンフレットにカラーのイラストや挿絵が加わり、民間に対してPRする性格に変化していった。『国防の本義と其強化の提唱』は部内資料に留まらず、民間も読者の対象の範疇であり、約60万もの部数が配布されている<sup>3</sup>。

- 『思想戦』の発行（「新聞班」、1934、思想国防協会）

『思想戦』では、第一次世界大戦後の英米による世界へのデモクラシー思想の頒布が日本の学界や言論界にも影響を与えたとし、こうした英米の日本に対する思

想戦工作がワシントン条約やロンドン条約における海軍の比率の惨敗につながり、日本は思想戦に失敗した<sup>4</sup>と見方がなされている。このような敵国思想への反感に対して、「太平洋時代」を主導する日本の思想戦の大根幹は「皇道文化聖戦」（「皇化」）の上に確立しなければならないと日本における思想戦の理念を提示した<sup>5</sup>。

## (2) 思想戦と文化

- 国民精神総動員運動（第一次近衛内閣）；「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」
- 内閣情報部による思想戦展覧会（1938年2月9日～27日、東京高島屋8階催場）  
展覧会の一般観覧者は延べ133万人を記録。大阪、福岡、佐世保、熊本、大分、札幌といった日本各地又は朝鮮の京城においても後援という形をとって展覧会が実施されたという<sup>6</sup>。※1940年2月10日～25日、高島屋で第二回思想展
- 思想戦講習会
  - 陸海軍・外務省・内務省の情報宣伝担当やメディア関係者らを首相官邸に集めて、講習会を開く（別表を参照）
  - 横溝光暉の『思想戦概論』（1940）
    - ① 思想戦と宣伝；「紙の弾丸」（ビラ）、「声の弾丸」（拡声器、蓄音機で故郷の民謡）、「音の弾丸」（空襲音）<sup>7</sup>
    - ② 思想戦における勝利は敵国の継戦意思を破砕することだけではなく、相手方に自国の思想を承服させ、やがて同化させることにありとされる。そのためには日本の伝統的な精神を明らかにしなければならない。そこで日本国内では肇国精神の高揚と国体観念の明徴による「思想国防」が民衆に行動指針を与える精神動員の方法として提示される<sup>8</sup>。

## (3) 「大東亜共栄圏」の言説

- 思想戦としての「大東亜共栄圏」
  - 奥村喜和男『尊王攘夷の血戦』旺文社、1943年  
情報局次長である奥村喜和男は「大東亜戦争は、大東亜に於ける新秩序建設戦」とし、「従来大東亜の旧秩序を支配した米英の旧思想を撃滅し、皇国日本の肇国精神に基づく八紘一字の新秩序を建設すること、これ、大東亜戦争の窮極目的である」と述べていた。その上で「大東亜戦争は思想の戦ひであり、武力も、経済力も且又政治力も、この思想戦目的に歸一統合さるべき本格的思想戦」<sup>9</sup>と表した。

- 高坂正顕「思想戦の形而上的根據」  
 思想戦≡「転換戦」、「思想を以ってする戦」であり、「思想戦に対する戦」(6)  
 「日本の使命を遮る英米的思想を撃滅しつつ、大東亜共栄圏の理念に向つて、国内の思想戦線を統一強化することにある。」(10) ⇒「大東亜共栄圏」の理念が「新たな世界史的時代を大東亜を中心として建設すべき使命」(8)
- 「家」と大東亜建設  
 古野伊之助の「対敵思想戦の本義」は大東亜建設を「家」に例えて、日本の主導の正統性を説明している。すなわち、日本の「家」では家長が家族全員の安危や彼らの成長を見守り、あらゆる苦難を一進に引き受けていることから、大東亜共栄圏において日本が家長の役割を果たすべく、「萬邦協和」の新秩序を建設しようとしており、今戦争は日本の「家族的世界観」と米英中心の「個人主義的世界観」の対決であるとしている<sup>10</sup>。
- 「大東亜共同宣言」と「大東亜共栄圏」
  - 「大東亜共同宣言」(1943年11月)を發表。  
 『主導国』日本を前提として、日本に『主導』されるアジア諸国と日本によって作られる『大東亜共栄圏』を否定して、アジア諸国との間で『自主独立』『平等互惠』の原則を確立することが、日本の戦争目的として、新たに掲げられた。」(井上、228頁)
  - アメリカを意識した宣言(「大西洋憲章」を念頭に)  
 「たとえ戦争に軍事的に敗れても、戦争目的は達成できる。このような敗戦の合理化のために、『大東亜共同宣言』を起草した」(井上、228-9頁)
- 「大東亜共栄圏」は思想なのか—竹内好の言説—
  - 「第二次大戦中の『大東亜共栄圏』思想は、ある意味でアジア主義の帰結点であった  
 が、別の意味ではアジア主義からの逸脱、または偏向である。」  
 (『現代日本思想大系 9 アジア主義』、13頁。)
  - アジアのナショナリズム  
 「玄洋社流のアジア主義は、見方によっては徹頭徹尾、侵略的ではあるが、その侵略性を平野のように隠してはいない。そして時勢におもねるのではなくて、時には政府に反攻して主張されたものである。したがってわれわれは、アジア主義の「類型」として当然こちらを採用しなければならない。」  
 (竹内「アジア主義の展望」『現代日本思想大系 9 アジア主義』、19頁)

- 玄洋社のアジア主義を擁護したのは、アジアのナショナリズムを重視していたから。⇒「大東亜共栄圏」思想；侵略のカモフラージュとして否定的。(井上、256 頁)

※「アジア諸国を結びつけている連帯意識」＝ナショナリズム（民族主義）

(竹内『日本とアジア』ちくま学芸文庫、1993 年、125 頁。)

#### (4) 思想戦と文化

##### ● 吉本興業

※明治後期の説立当初は小さな寄席芸であったが、昭和後期から急成長を遂げ、大阪と東京を含め数十もの上演会場を所持するに至る。1930 年には娯楽専門雑誌『吉本』を出版。1930 年代屈指の大物漫才コンビに花菱アチャコと横山エンタツが挙げられる。日本兵を楽しませるための「慰問部隊」の派遣も行われた。(クシュナー、176 頁)

##### ● 満州事変

1931 年 12 月、吉本興業は朝日新聞と協力し、アチャコ・エンタツなど人気の円芸人を「慰問部隊」として満州へ送り出した。それから新京や奉天、遼寧省の各地とその周辺地域も巡業（1932.2.25 に日本に帰還）(同 177-8 頁)

【参考】『吉本八十年の歩み』、48 頁。

- 1938 年 1 月 13 日、再び、吉本興業は朝日新聞と共同で、中国にいる日本兵のために「慰問部隊」を招集。（「わらわし隊」と名付けられた）

20 人程度で 2 班 （クシュナー、186 頁）

→同年、11 月～12 月に「わらわし隊」第二弾南・中央・北支那の 3 班 (同 190 頁)

##### ● 国際文化振興会（KBS、1934～）

- KBS 総裁…高松宮宜仁親王、会長は近衛篤磨
- 外務省管轄から、1940 年 12 月から情報局による助成・監督指導。
- 「大東亜戦争」前後の文化活動の差異

###### ①「平和型指向の相互理解型の考え方」？

「日独文化の夕」「日伊文化の夕」；「日独文化協定」（1938）、「日伊文化協定」（1939）（日本人の演奏や日本伝統文芸と西洋音楽の融合）<sup>11</sup>

###### ②「パワー指向の思想的な考え方」

KBS による文化政策として特筆すべきは仏印巡回現代日本画展覧会の開催である。KBS 主催で 1941 年 9 月に日本で内示会（日本橋三越）を行ったのち、10 月～12 月にかけてベトナムのハノイ、ハイフォン、ユエ、サイゴンを巡回し、日本画（横山大観「竹林の月」など）や版画（日本版画協会の代表作家、平塚運

一「臼杵石仏」など）が展示された<sup>12</sup>。この展覧会は皇軍慰問（各巡回地で日本軍将兵を無料招待した）と講演会やレセプションを通した日本と仏印の間の友好関係構築の役割を担った<sup>13</sup>。油絵のような洋画は展示されず、「大東亜共栄圏」を目指す南方への文化政策として日本画が展示することになった点においては思想戦の論理に沿ったものであるといえるが、そもそも北部仏印進駐は仏印政権が温存されたので、「大東亜共栄圏」建設の理念と多少距離があった<sup>14</sup>。

- ラジオ

- ラジオ講演放送

1937年～1944年の間の「講演放送」の中で、「聖旨」や「御稜威」、「国体」など天皇に関連ある語が多用されている他、「尽忠報国」や「大和魂」、「一億一心」のような国民団結を掲げ、国民の戦意高揚を促す語、「東亜新秩序」や「大東亜建設」のような日本の戦争理念を示す語も使用頻度が高い<sup>15</sup>。

- 「国民合唱」

「大東亜戦争」が始まってから、日本放送協会は放送番組である「国民合唱」に力を注ぎ、国民の戦意高揚を促進させていた。「国民合唱」は情報局の指導により日本放送協会が第二回大詔奉戴日（1942年2月8日）から始めた番組で、番組名の命名は情報局第二部第三課長の宮本良男による<sup>16</sup>。情報局が編集していた『週報』に楽譜を掲載され<sup>17</sup>、1942年2月18日発行の第280号の「此の一戦」から1945年7月11日発行の第450・451合併号の「国民義勇隊」まで57曲も紹介されていた<sup>18</sup>。

- 「適性音楽」

1930年代、洋楽レコード市場が発展とともに大衆的に注目を集めたジャズはアメリカナイズされた「敵性音楽」とされ、「支那事変」以降に洋楽番組から「ジャズ」の名のついた番組がなくなった<sup>19</sup>。ただし、1941年7月の「出版警察報」に記載されている、情報局第五部第三課が作成されたとされる<sup>20</sup>「ジャズ音楽取締上の見解」では旋律の騒擾的なリズムであったり、煽動的・淫蕩的感情あるいは怠惰感を抱かせるような類のジャズは非難しているものの、「良い意味のジャズ音楽の類は現時局下簡易なる慰楽の一つとして容認されて然るべきものと思考される」とあるようにジャズを全面的に否定していた訳ではないことが窺える<sup>21</sup>。

表 内閣情報部による思想戦講習会

第一回思想戦講習会（1938 年）	
国家と情報宣伝	横溝光暉（内閣情報部長）
日本精神と思想戦	藤沢親雄（内閣情報部嘱託・大東文化学院教授）
国際思想戦の現状	安藤義良（外務省調査部第三課長）
支那事変と国際情勢	矢野征記（内閣情報部委員・外務省情報部第三課長）
戦争指導と思想戦	高嶋辰彦（内閣情報部情報官・陸軍歩兵中佐）
戦争と宣伝	清水盛明（内閣情報部情報官・陸軍砲兵中佐／陸軍省情報部長）
日本戦争論の梗概	多田督知（内閣情報部情報官・参謀本部委員・陸軍歩兵大尉）
支那事変と英米	小川貫璽（軍令部第五課長・海軍大臣／総力戦研究所所長）
支那の抗日思想戦	雨宮巽（内閣情報部情報官・陸軍歩兵大佐・大本営報道部企画課長／天津特務機関長）
スパイ戦の現状と膨脹	白浜宏（関東軍・陸軍憲兵大尉）
フリーメイソンに就いて	犬塚惟重（軍令部・海軍大佐／支那方面艦隊司付）
思想戦と警察	富田健治（内閣情報部委員・内閣警保局長／内閣書記官長・総力戦研究所参与）
人民戦線に就いて	清水重夫（内閣情報部委員・内務省保安課長／セレベス民政部長官）
思想犯罪の現状	平野利（司法省刑事局第五課長／大審院検事）
マルキシズムの克服	平野勲（東京保護観察所長／満洲国司法部最高検察庁次長）
学生思想問題	阿原謙蔵（内閣情報部委員・教学局企画部長／文部省国民教育局長）
思想戦と新聞学	小野秀雄（内閣情報部嘱託・東京帝国大学新聞研究主任）
思想戦と新聞	緒方竹虎（内閣情報部参与）
思想戦と映画及び演劇	小林一三（内閣情報部参与）
思想戦と出版業	増田義一（内閣情報部参与）
思想戦と通信機関	岩永裕吉（同盟通信社社長）
思想戦に於けるラヂオの機能	田村健次郎（内閣情報部委員・逓信省電務局長）
第二回思想戦講習会（1939）	
思想戦の理論と実際	横溝光暉
国際思想戦の現状	井上宏二郎（外務省欧亜局長／ボルネオ民政部長官）
国体の本義と神ながらの精神	笈克彦（東京帝国大学名誉教授法学博士）
国家総動員の現状と将来	植村甲午郎（企画委員産業部長／企画員次長）
支那事変と宣伝	清水盛明

ソ連邦事情と防共	川俣雄人（参謀本部課長・陸軍歩兵大佐／中野学校長）
新支那建設の基調	日高信六郎（情報部委員・興亜院経済部長／駐伊大使）
海防思想問題に就いて	関根郡平（海軍少将）
第三回思想戦講習会（1940）	
思想戦概論	横溝光暉（内閣情報部長）
日本精神と思想戦	安岡正篤（陽明学者／大東亜省顧問）
武力戦に伴ふ思想戦	松村秀逸（内閣情報部委員・陸軍砲兵中佐・大本営陸軍報道部長）
外交戦に伴ふ思想戦	須磨弥吉郎（内閣情報部委員・外務省情報部長）
海洋思想と思想戦	金沢正夫（内閣情報部委員・海軍軍事普及部委員長・海軍少佐／ 大本営海軍部報道部長）
思想戦と宣伝	小山栄三（人口問題研究所研究官）
思想戦と新聞通信	古野伊之助（内閣情報部参与・同盟通信社社長／大政翼賛会総務）
更生新支那政権の現在及将来	鈴木貞一（内閣情報部委員・興亜院政務部長／企画院総裁）
満洲国に於ける思想戦	大越兼二（関東軍参謀／陸軍歩兵少佐／憲兵司令部総務課長）
米国の対日動向とその海軍	松田千明（軍令部課長・海軍大臣／総力戦研究所所員）
国内思想動向と防諜	本間精（内閣情報部委員・内務省警保局長／大政翼賛会団体局長）
思想戦と財務経済	賀屋興宣（北支那開発総裁／東条内閣蔵相）
思想戦と文芸	菊池寛（内閣情報部参与・文藝春秋社社長／ 大政翼賛会中央協力会議員）

〔奥平康弘『戦前の情報機構要覧』日本図書センター、1992年、153・156頁；佐藤卓己（1995）「総力戦体制と思想戦の言説空間」山之内靖 ヴィクター・コンスマン 成田龍一 編『総力戦と現代化』柏書房、321-323頁より作成。なお、名前の後についている括弧中は当時の肩書きを記している。スラッシュの後は戦時中（「支那事変」から）の経歴である。〕

#### 参考文献（註以外）

1. 井上寿一『増補 アジア主義を問いなおす』
2. 高坂正顕「思想戦の形而上的根拠」『中央公論』58（6）（670）、1943年6月号
3. 竹内好『日本とアジア』ちくま学芸文庫、1993年
4. 竹内好「アジア主義の展望」『現代日本思想大系 9 アジア主義』
5. バラク・クシュナー著・井形彬訳『思想戦 大日本帝国のプロパガンダ』  
明石書店、2016年

## 「思想戦の系譜」(卒業論文)

- <sup>1</sup> 里見脩「同盟通信社の『戦時報道体制』—戦時期における通信系メディアと国家」、山本武利編『メディアのなかの「帝国」』岩波書店、2006年、174頁。
- <sup>2</sup> 福島鏗郎「戦時言論統制機関の再検証『情報局』への道程(1) 内閣情報委員会設立とその背景」『総合ジャーナリズム研究』(23) 東京社、1986年、102頁。
- <sup>3</sup> 江口圭一「満州事変期の陸軍省パンフレット」『愛知大学法経論集 法律編』(113)、1987年、182頁。; 辻田『大本営発表』24頁。
- <sup>4</sup> 陸軍省新聞班『思想戦』、17、28頁。
- <sup>5</sup> 同上、28-29頁。
- <sup>6</sup> 津金澤聡廣・佐藤卓己編『内閣情報部 情報宣伝研究資料 第8巻』柏書房、1994年、383-384頁。
- <sup>7</sup> JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. A06031113200 (第7、8画像目) 内閣情報部『思想戦講座第七輯 思想戦概論』、1940年、国立公文書館所蔵。
- <sup>8</sup> JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. A06031113200 (第10、16画像目)。; JACAR Ref. A06031112900 (第5画像目) 内閣情報部『思想戦講座第四輯 思想戦と宣伝』、1940年 国立公文書館所蔵。
- <sup>9</sup> 奥村喜和男『尊王攘夷の血戦』旺文社、1943年、324頁、345頁。
- <sup>10</sup> 古野伊之助「對敵思想戦の本義」『中央公論』1月号、中央公論社、1944年、44頁。
- <sup>11</sup> 酒井健太郎「国際文化振興会の対外文化事業—芸能・音楽を用いた事業に注目して」戸ノ下達也/長木誠司『総力戦と音楽文化—音と声の戦争』青弓社、2008年、128-133頁、138頁、140-142頁、148頁。
- <sup>12</sup> 桑原規子「国際文化振興会主催『仏印巡回現代日本画展覧会』にみる戦時期文化工作—藤田嗣治を『美術使節』として—」『聖徳大学言語文化研究所論叢』(第15号)、聖徳大学出版会、2007年、235-238頁。
- <sup>13</sup> 同上、242頁。
- <sup>14</sup> 同上、232頁。
- <sup>15</sup> 同上、52頁、54頁。
- <sup>16</sup> 竹山『太平洋戦争下 その時ラジオは』、154-155頁。
- <sup>17</sup> 竹山『戦争と放送』、22頁。
- <sup>18</sup> 竹山『太平洋戦争下 その時ラジオは』155-156頁。
- <sup>19</sup> 武田康孝「ラジオ時代の洋楽文化—洋楽番組の形成過程と制作者の思想を中心に」戸ノ下達也/長木誠司『総力戦と音楽文化—音と声の戦争』青弓社、205頁。
- <sup>20</sup> 内川『現代史資料 41 マス・メディア統制 2』、xxxvi 頁(資料解説)。
- <sup>21</sup> 同上、354頁。因みに良い意味でのジャズは以下の通り。  
一、各国の特色ある民族性を強調した旋律を有する音楽 二、軽快にして陽気なる音楽(騒擾的に過ぎざるもの) 三、諧謔的軽音楽 四、抒情調音楽 五、勇壮感を有する音楽